

20
27

生活科学研究科



修士課程
食品栄養科学
専攻

修士課程
生活環境学
専攻

博士後期課程
人間生活科学
専攻

人間の生命を維持するのみでなく、健康を保持・増進するために、さらには人間として充実した人生を送るために、高齢社会の進展とともに「食」の担う役割はますます高まっています。食品栄養科学専攻では、人間の生命と健康の糧である食品と、栄養、健康、疾病との関わりについて、最新の科学的方法を用いて研究し、高度な知識・技術と専門的能力を有する人材を育成します。生化学、栄養化学、食品衛生学、食品機能学、臨床栄養学、栄養保健学の研究分野の中から、希望する分野において、教員の指導の下で研究課題に取り組み、修士論文としてまとめます。その過程を通して、広い視野を養い、豊かな専門的能力を身に付けていきます。

人体を中心とした衣・被服に代表される身近な環境から、室内環境及び建物、都市、地球環境にいたる広範な生活環境領域を研究対象としています。生活環境学専攻では、研究対象領域をアパレルメディア、インテリア・プロダクト、建築・住居の3領域にわけ、各領域の融合化を図りながらそれぞれ高度な専門知識の修得と研究能力の育成を目指しています。アパレルメディア領域では安全で快適な被服を、インテリア・プロダクト領域では建物の内部空間・家具などを、建築・住居領域では建築計画・設計、建築構造・材料、都市計画、環境・設備などを研究対象として捉えています。なお、建築・住居領域の所定の単位を修得することにより一級建築士登録要件の実務経験1年が免除されます。

21世紀は「知の世紀」、あるいは「人間の世紀」とも言われ、「知の創造と活用」がキーワードになっています。20世紀には科学技術が爆発的に発展し、人間社会は大きく変貌しています。科学技術は人間に多くの知を与え、また多くの利便を提供してきました。しかし、一方では科学技術の発達に伴って多くの新たな問題に直面することとなり、従来の考え方では解決が困難な問題が山積しています。このような社会の喫緊の要請に応え、人間生活科学専攻では、創造生活科学、展開生活科学、統合生活科学の3つの研究領域において、生活科学の知を創造し、発展させ、統合し、将来を担う研究者及び高度な専門知識・技術を有する専門家を養成します。

授業科目概念図



特色

- 中部地方初の生活科学系大学院を基礎として、時代の変化や社会のニーズに対応した学術研究を推進するとともに、次代を担う研究者、高度な専門的能力で社会で活躍する人材を育成します。
- 博士後期課程では、より高度な研究者の養成を目指しています。
令和5年度までに課程博士14名、論文博士5名を輩出。教育・研究(職)・専門職の道を歩んでいます。
- 中学校および高等学校教諭専修免許状(家庭)の取得が可能です(一種免許状を取得していることが条件です)。

ジェンダーギャップ解消のために

世界では、SDGs達成が大きな目標として掲げられています。その一環であるジェンダーギャップの解消は、我が国に求められている重大課題の一つといえます。女性が、普通に活躍できる社会こそが、私たちが目指す社会にほかなりません。生活科学研究科では、女性のための修士課程、博士

課程を備えており、衣・食・住の分野において、高度な知識や技能を修得し、社会で活躍できる魅力的なリーダーとなるべく女性の育成に努めています。複雑に変化する現代の生活環境において、さまざまな研究分野から課題を探索、解明することにより、より良い生活環境の実現を目指しています。



生活科学研究科長
加藤 昌彦

食品栄養科学専攻 修士課程

人間らしく豊かに生きるために大切な「食」と「健康」を、
あらゆる角度から総合的に教育・研究する新しい学問領域。

人の健康に関して、食と栄養の面から科学的に研究を行い、
広い視野と深い洞察力を持ち、高度な専門知識と能力を身に付けた人材を育成します。
課題研究の遂行と修士論文の作成を通して、医療・介護分野の管理栄養士、食育・家庭科教育の専門家、
食品関連企業の専門家・研究者として活躍できる能力を身に付けていきます。

食品科学領域

■食品衛生学分野

【研究テーマ】人が毎日摂取している食べ物には、健康の維持増進に役立つ一方、健康に悪影響を及ぼすものもあります。近年、がんや動脈硬化、肥満、糖尿病などの生活習慣病の発症に、活性酸素だけでなく炎症が密接に関係することが明らかになってきています。食品汚染物質や加工食品に含まれる添加物などは、生体内で酸化ストレスや炎症反応を引き起こす可能性があり、さまざまな疾患の発症や進行に関与することが考えられます。当研究室では、それら食品由来の種々の化学物質について、安全性の検討を目的として遺伝子損傷作用など、生体への影響について研究しています。

【メッセージ】食品には、「栄養」「嗜好性」「生体調節」の3つの機能がありますが、安全性が損なわれてはこれらの機能は成り立ちません。「安全性」は食品全体の要素となります。最近、テレビや新聞、インターネットでは、食と健康に関する情報があふれていますが、大げさなものや間違っているものも見受けられます。本研究科で食と健康について、正しい知識をもって一般の人に説明できる能力を身につけてください。
【詳細】大学院生活科学研究科食品栄養科学専攻(修士課程)
(<https://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/academics/g-nutr/food/>)で公開しています。
【担当教員】准教授 及川 佐枝子

■生化学分野

【研究テーマ】高齢化に伴いがん・認知症などの種々の老年病を発症し、QOL低下の原因となっています。高齢化に伴う老年病発症を遅延させ「健康寿命」を延長させることは重要な事案となっています。老年病発症の共通のリスクファクターは老化で、とりわけ注目されているのが、細胞の老化「細胞老化(Cellular Senescence)」です。また最近の研究から、細胞老化を起こした細胞(老化細胞)が炎症やがんの進展を促進する種々の液性生理活性因子を分泌することが明らかになってきています。この現象は、「細胞老化随伴分泌現象(SASP)」と呼ばれ、老年病の発症や個体老化と密接に関わっていると考えられています。そこで研究室では、細胞老化および

SASPを制御する分子メカニズムを明らかにするとともに、それらを抑制する食品由来の生理活性因子の探索を行い、老年病発症や個体老化の予防に関する有効な食品情報の提供を目指しています。
【メッセージ】日本の超高齢化社会において、老化研究は重要な課題です。当研究室では、生化学・分子細胞生物学的手法を駆使しこの課題に取り組むとともに栄養学的アプローチも行いたいと考えています。またこれらの研究を通して、科学的思考も身に付けてもらうことを期待しています。
【担当教員】教授 本山 昇

■食品化学分野

【研究テーマ】食品に含まれる成分とその効果について、化学・生物学実験により明らかにすることを目指し、研究を進めています。例えば、フラボノイド等食品成分の炎症および疾病予防効果について、愛知県額田郡幸田町産筆柿と筆柿葉茶に含まれる成分とその機能性評価、放射性セシウムによる内部被ばくによる被害を抑制する食品成分の探索とその評価系の確立などです。

【メッセージ】本分野では、食品の性質について実験により調べていきます。得られた結果に対して、過大評価も過小評価もせず、そこから言えることを科学的・論理的に考察し、次の実験は何をすればいいのかを考え計画して研究を進め、最終的に論文をまとめる能力を一緒に身に付けていきます。食の専門家として、さまざまな角度から食品についての情報を見つめ、科学的・論理的に伝えることができるよう、楽しみながら頑張りましょう。
【担当教員】准教授 保田 倫子

栄養科学領域

■栄養化学分野

【研究テーマ】食品に含まれるマイクロニュートリエント(ファイトケミカルなどの微量栄養機能成分)に関する研究を行っています。中でも、「高齢化社会の到来」や「生活習慣病の増加」といった社会問題をはじめ、「食品による美容効果への期待」といった社会ニーズに応えるべくマイクロニュートリエントを見出すことを目的として、種々の培養細胞やモデル動物を用いた探索研究および分子レベルでの作用メカニズム解析を進めています。また、「皮膚」は常に経視できる器官として、体内の状態を計り知る糸口となります。そのため、美しく健やかな肌は食との関わりを抜きにして

手に入れることはできません。これまで「皮膚」は外面的美粧の主対象とされてきましたが、科学的根拠の少ない摂食経由の栄養学的な内面美容(内側からいきいきとした肌をつくる)の重要性を検証し、「健やかで美しくあるための食育」についても考究していきます。
【メッセージ】大学院での研究活動を通じて生命科学の面白さを肌で感じてください。
【担当教員】教授 大口 健司

栄養科学領域

■臨床栄養学分野

【研究テーマ】人間栄養学に基づき、健常者、高齢者および傷病者の栄養状態の把握、あるいは把握のための手法の開発、従来の把握法の有用性を検証し、そのうえで、栄養学的問題が存在する者に対する栄養介入の効果を疾病予防あるいは疾病治療の点から検証します。臨床栄養学分野では、基本的に病院、介護施設および保健所などの臨床現場を主たる研究の場としているため、研究対象は、健常者、高齢者、傷病者のいずれも可能です。したがって、学部新卒学生のみならず社会人にも大きく門戸を開いており、すでに臨床現場で活躍している社会人の場合は、現在の職場を活用して研究を企画、推進することができメリットが大きいと考えます。

【メッセージ】臨床現場で活躍する管理栄養士にとって、臨床能力(臨床現場で栄養ケアを実践する能力)と研究能力(研究成果を学会報告や論文化する能力)は車の両輪であり、当然これら両者が求められることになります。新卒学生には、これまでの知識に磨きをかけるとともに、臨床現場での栄養ケアの実践が必要です。一方、すでに臨床現場で活躍されている管理栄養士のなかには、十分に臨床能力を有しているにもかかわらず、みずから臨床研究を企画、実践し、その結果を論文化することは、あまり得意でないといったケースも少なくありません。臨床現場における今後の管理栄養士の発展のために、是非、これらの能力を大学院で身につけていただきたいと思います。
【担当教員】教授 加藤 昌彦

■公衆衛生学分野

【研究テーマ】公衆衛生学の研究対象は人間(集団)です。ここでは、比較的規模が大きいアンケート調査(疫学調査)や、健康教育の効果検証のための介入的疫学調査などを行っています。研究テーマは、おおよそ人々の健康に関するものであれば自由に選べますが、現在は、食に関する健康情報の見方・考え方に関する研究、健康教育の効果に関する介入研究、日常生活が精神的健康に与える影響などの研究など中心に行っています。

【メッセージ】アンケート調査(疫学調査)や統計解析の手法などは、公衆衛生学の基本となる技術なので、大学院でも基礎から学ぶことができます。また、健康教育の効果検証は、これまで関わってきた教科開発学(教育学)の経験をいかして、実証的かつ科学的な検証の方法論を学ぶことができます。
【担当教員】教授 古田 真司

■栄養保健学分野

【研究テーマ】毎日の食事は、体に必要なエネルギーと栄養素を得るために必要ですが、その一方で、体の恒常性を大きく乱す要因の一つでもあります。それ故、恒常性を維持し、食事に伴う様々な疾患(肥満や糖尿病などの生活習慣病)を予防するためには、食事の時刻、食事内容を予測して代謝の乱れに対応し、栄養素を適切に各組織に供給することが必要です。当研究室では、これらの調節に脳がどの

ような作用を営んでいるかを、動物や人で研究しています。
【メッセージ】食事は、単に栄養素を摂取するだけでなく、「快・不快」の感情と密接に関係しています。脳による摂食・代謝調節作用が、この「快・不快」感情とどう関係するかについても、興味を持って研究しています。
【担当教員】教授 箕越 靖彦

■修士論文テーマ例

- 脱水モデル動物における糖質・タンパク質溶液の体水分保持作用の比較検討
- 乳酸発酵豆乳及び豆乳チーズ様食品の試作とその抗酸化性について
- ヒト表皮細胞におけるウイスキー・コンジェナーのheme oxygenase発現誘導作用
- 若年女性の食意識と食行動―椋山女学園の小学生から大学生まで―
- 大豆発酵食品中のメラニン生成抑制成分に関する研究
- オカラ紅麹の抗酸化性及びその有用性
- 慢性肝疾患患者における栄養状態の現状とその評価法に関する検討

- 食後の糖・脂質代謝に及ぼすショ糖摂取の影響
- 健常若年女性の出生時状況と現在の状況との関連に関する研究
- DOHaD学説の検証と栄養方法による児の将来への影響の検討
- 脂肪とフルクトースの同時摂取による糖・脂質代謝に対する有酸素運動の影響
- 回復期リハビリテーション病棟退院高齢患者の退院時栄養状態、ADL、認知機能及びQOLが退院後の在宅生活に及ぼす影響

■修了生の主な進路・活躍先

- 公共機関：科学技術振興事業団、国立長寿医療研究センター、日進市保健センター、愛知県学校栄養職員、名古屋市(保育・栄養)
- 教育機関：愛知学院大学、愛知学泉大学、金城学院大学、至学館大学、修文大学、椋山女学園大学、中部大学、中部学院大学、東海学園大学、名古屋芸芸大学、名古屋経済大学、名古屋文理大学、名古屋栄養専門学校、糸菊学園名古屋調理師専門学校、各高等学校
- 病院：(医)循行会グループ、国家公務員共済組合連合会 東海病院、(医)喜峰会 東海記念病院、

- (医)新生会 第一病院、(医)知邑舎 岩倉病院、名古屋厚生院、大垣市民病院、岐阜社会保険病院
- 民間企業：味の素ファルマ、アドバンテック、オリザ油化、川上酢店、紀文食品、ココストア、サンコール、前原養豚、モスフードサービス、盛田、リノール油脂
- 進学：名古屋大学大学院博士課程(後期課程)、椋山女学園大学大学院博士後期課程、女子栄養大学大学院博士後期課程

生活環境学専攻 修士課程

私たちを取り巻く生活環境のありよう・あるべき姿を幅広い視点から追究します。

生活環境学専攻では、人体を中心とした被服に代表される身近な環境から、建築、都市、地球環境にいたるスケールを研究対象としています。本専攻は、「アパレルメディア領域」、「インテリア・プロダクト領域」、「建築・住居領域」の3領域で構成され、高度な専門知識の修得と研究能力を養うとともに、それらを人類の生活に生かす知恵を備えた人材の育成を目指します。

アパレルメディア領域

■アパレル設計・制作分野

【研究テーマ】 私たちが着用しているアパレルは、単に布地やデザインだけでは成立しません。制作されて初めて衣服として成立します。さらに、そこには着衣基体としての「人」が存在し、人が着用して初めてアパレルとしての用をなします。着衣基体である人はモノではなく、常に動き、一時として全く同じ状態にはありません。アパレル設計・制作においては、人にとって着やすく、快適で、さらに美しい衣服を作り出すことが究極の目的になります。そこには人と衣服の物理的な動きだけでなく、生理的、心理的な要因なども複雑に絡み合っています。この分野はこれらの要因を解明

していくことが主な研究内容といえます。最近は、美しい着装のためのゆとり量に関する研究やマルチデバイス対応型アパレル制作コンテンツについて研究しています。【メッセージ】 アパレルメディア領域の各分野は独立しているものでなく、全て繋がっています。大きな視野を持って関連分野を含めて学修し、研究には細かい配慮をもって挑んでもらいたいと思います。さらにこの分野のスペシャリストとして少しでも社会に貢献してくれることを望みます。【担当教員】 特命教授 石原 久代

■アパレル染色・整理学分野

【研究テーマ】 アパレルデザインを現実のものにするためには、テキスタイル上に思い描く色及び柄を表現することができる染色加工技術が不可欠です。染色加工技術を理解するためには、染料、繊維、水の化学的な関係、光、高分子の物理的な性質などから、それらが環境や人へどのような影響を及ぼすかまで、非常に広い視点で関連する事柄や課題をとらえていく必要があります。また、アパレル製品が使用される時に必ず行われる洗濯においても同様のことが言えます。新しいアパレルデザインを生み出したり、支えたりする染色や洗濯に関する技術や繊維製品によって人

の生活をより快適する技術に魅力を感じ研究を行っています。【メッセージ】 染色加工が、色や機能を与える何らかの必要なものを繊維に付与することであるとすれば、洗濯は、汚れなどの不要なものを繊維から取り除くことと考えることができます。染色加工と洗濯・整理をいわば表裏一体の関係としてとらえて考えることが重要です。作ることと使うことを同時に思い描くことができるファッション産業のプロフェッショナルになってください。【担当教員】 教授 解野 誠司

■アパレル材料システム分野

【研究テーマ】 アパレル材料の本質的な品質や性能には時代や流行、個人の嗜好にとらわれることのない人間の感性に適合した普遍的な品質が存在するであろうことが考えられます。このような視点から、主として婦人服地の品質に関して、人間の感性との関わりから、より人間に好まれる高度な人間の感覚で捉える品質として、風合い、主観的評価の判断基準、着衣基体と衣服の関わり等を明らかにして、具体的な性能設計に生かすような研究を進めてきています。婦人服地の力学的性質、

熱水分移動特性からシルエットデザインや品質を客観的に評価しています。【メッセージ】 より快適で、美しく、生活の質を高めるような専門知識と能力を身につけて、周辺の知識も吸収して、社会に貢献してほしいと願っています。婦人服地の品質を客観的に評価する客観評価式を導き、発表しており、主な研究は大学Webサイトの教員紹介にて公開しています。【担当教員】 准教授 井上 尚子

インテリア・プロダクト領域

■プロダクトデザイン分野

【研究テーマ】 1. デザインの歴史とは、材料と加工法の歴史といっても過言ではありません。ここでは新しいデザインの技術開発を目的とした「各種材料と加工法による造形技法・表現技法」を研究テーマとします。最近の研究では、チタン圧延クラッドメタルの熱間処理及び陽極酸化法による電解染色、ハーフセレーションブレイドの用途開発、アルミハニカムパネル後アルマイト加工技術を使った用途開発、蓄蛍光素材の用途開発などが、研究テーマとして取り組みます。2. 「自助具の研究」脳卒中後遺障害片麻痺者の支援団体と連携で、使用者から直接意見を取り入れた自助具を考案し、制作または委託制作を行います。最近の

研究では、片麻痺者のための調理用自助具、片麻痺者のための着衣を助けるための自助具などが、研究テーマとして取り組みます。また、ここでの成果品は自助具フォーラム(全国大会)で口頭発表と作品展示を行います。【メッセージ】 デザイナーを育てるための研究室です。デザイナーの社会的役割とは、デザインの力を社会のためにどのように役立てるかを考えることです。大学院での研究の成果は、日本デザイン学会、自助具フォーラム等で発表し、デザイナーとしての実績をつくってください。【担当教員】 教授 滝本 成人

■環境心理学分野

【研究テーマ】 現在の生活環境は、多様なモノ・空間・都市があり、それに伴い、多様な価値観が存在しています。この多様な価値観が存在する生活環境を考える際には、この生活環境内にいる人間の心理、感性や行動を把握することが重要な要素になってきています。そこで、環境心理学分野では、人間が使用するモノ、活動する空間、交流する都市について、多角的な視点から分析し、人間の感性、心理的特性、および行動特性を明らかにすることによって得られた知見を活用して、現在の生活環境とプロダクト・インテリア・建築との関連性を模索します。

■インテリアデザイン分野

【研究テーマ】 福祉の利用を促進するインテリアデザインに関する研究を行っています。少子高齢社会を迎え、子ども・高齢者・障がい者のケアを家庭から社会全体で担う必要性が高まっています。そこでインテリアデザイン分野では福祉的な観点から住環境のインテリアを再構築すること、および、地域での支援を可能にする、既存ストックを活用した新たな場の創出手法について研究します。

【メッセージ】 現在の生活環境を考える際には、ある一定の視点から考えるだけでなく、多角的な視点から考えることが大切です。そういった多角的な視点を身につけることが環境心理学分野の特徴です。また培った知識や技術を実践することも重要であるため、デザインに関係するコンペやプロジェクトなどにも積極的に取り組みます。研究のテーマやコンペ、プロジェクトの詳細については、槁本雅好研究室のWebサイト(https://hasshi-masa.jimdofree.com)で確認できます。【担当教員】 准教授 槁本 雅好

【メッセージ】 インテリアデザインとは、表層的なデザインを求めるものではありません。人との距離が近い部分をデザインする点において、より人の感情や人と人との関係について理解したうえで、その行為を誘発するようなデザインを具現化する必要があります。机上だけの理解にとどまらず、実社会での計画・設計活動を踏まえて、より深く理解できるように指導していきます。【担当教員】 准教授 井澤 幸

建築・住居領域

建築・住居の領域から一定以上の単位を修得することにより、一級建築士登録要件の実務経験1年が免除となります。

■地域・建築計画分野

【研究テーマ・メッセージ】 村上研究室の研究分野、手法、対象のキーワードは、都市・地域・建築の再生、建築計画/地域計画、構法計画/生産システム、建築経済、住宅/団地計画、情報技術、町おこし/村おこし、国際比較・海外事情、超高齢社会・医療、サステナビリティ、木造、意思決定プロセス、エネルギーシステム、技術とデザイン、テーマパーク/非日常空間などです。欧・米・アジア・オセアニアの教育研究者や建築家らとの人脈を活かし、国際共同研究・国際比較研究を積極的に行っています。研究成果に一貫して共通する問題意識は、「時代のダイナミズムを反映した「よい」デザインを如何にして実現するか」という課題で、研究成果をWebサイト

(https://shinmurakami.com)で公開しています。研究活動に加え、研究内容とデザインに対する価値観を世に問う手法として、また、研究・教育へのフィードバックを図る目的で、研究室では、計画・設計活動も行っています。地域計画、建築・住宅設計の実務や、設計デザインコンペティション、デザインイベントなどへ積極的に参加しています。成果については、「村上 心」のWebサイトを参照してください。【担当教員】 教授 村上 心

■建築環境工学・設備学分野

【研究テーマ】 人間活動や自然環境により形成される微気候と人間との関連を追究し、人間の快適性を健康問題やエネルギー問題の解決に応用することを目指しています。人間にとって健康で快適な居住環境を創造したり、現在の居住環境を改善したりするためには、温熱環境が人体に及ぼす影響を人体の生理反応や心理反応を通して正確に把握することが不可欠です。快適環境工学研究室では、人間と環境との間の熱の動きという側面から人間の感覚を探究しています。そして、体感温度指標の仕組みを明らかにし、温熱環境の評価方法と体感温度を考究しています。研究活動は、温熱環境の人体影響の解明とその結果を居住環境の創造や改善に活かすことを目的とし、住文化とライフスタイルを環境評価に応用することで、快適な住環境の開発に向けた体感温度を組込んだ環境制御システムの開発を進める

ものです。行動性体温調節を評価可能な温熱環境評価指標を開発し、生活空間における至適温熱環境条件を提案していきます。【メッセージ】 研究室では、健康で快適な都市・建築・人間環境の創造を目指して、持続可能な居住環境の科学的な解明と環境設計に対する合理的な意思決定をするための人間を主体とした生理・心理的な研究をおこなっています。人間と環境に関心を持ち、創造的研究活動に主体性を持って取り組めるよう、課題解決に必要な高度な知識と技術が身に付けられるように指導していきたい。【詳細】 大学HP(https://www.sugiyama-u.ac.jp)の大学院生活科学研究科サイトで公開しています。【担当教員】 教授 藏澄 美仁

■施設計画分野

【研究テーマ】 人口減少社会の到来、少子高齢化の進行といった社会情勢の中で、都市や地域における施設総量の最適化や、機能の再配置が求められています。例えば、学校・住宅等の都市施設についても、老朽化、建て替え／維持管理の資金の不足、利用者のニーズの変化への対応など、さまざまな課題を抱えています。こうした背景を踏まえ、川野研究室では、ファシリティマネジメントの視点からみた都市施設の利活用に関する研究を行っています。最近の研究テーマの例は、「小学校施設ストックの利活用」、「公共施設のマネジメント手法」、「住宅団地再生プロジェ

クトの評価」などです。【メッセージ】 建築・住居の学問分野全体への関心を広く持ちながら、施設計画についての専門知識を修得し、研究に取り組んでいきましょう。研究の意義を考え・見出す大きな視点と、個々の事象にも着目する細やかな視点の両面から、研究指導を行いたいと思います。主な研究成果については、大学Webサイトをご覧ください。【担当教員】 准教授 川野 紀江

■修士論文テーマ例

●タイトスカートの椅座位における裾線の挙動
●中学校家庭科における制服を利用した服育
●毛髪物性におよぼすシャンプー／コンディショナーの影響
●衣服のデザイン要素が人体に及ぼす生理・心理的影響に関する研究
●車椅子利用者のための生活自立支援の研究―洗面回りと調理について―
●ジェンダーとインテリア空間の関係に関する研究
●チャイルド・コミュニケーション・デザインと空間的特徴を持つ保育園における子どもたちの行動様態に関する調査研究

●徳島県三好市の空き家改修設計とお試し住居の実態及び評価
●競技ルールの変遷と公共の大規模屋内プール施設との関係性からみた改修計画
●地域再興計画：住民の地域再生に対する意識の把握と空き家活用の設計提案
●歴史的背景に基づく継続的コンバージョン建築の設計―明治から現代までの犬山城をケーススタディとして―
●薄鋼板を加えた面格子壁の耐震性能評価に関する研究

■修了生の主な進路・活躍先

●公共機関：(一財)ボーゲン品質評価機構、(一財)ニッセンケン品質評価センター
●教育機関：名古屋大学、お茶の水女子大学、愛知学泉大学、愛知大学、愛知産業大学、金城学院大学、椋山女学園大学、名古屋学芸大学、名古屋女子大学、愛知文教女子短期大学、岐阜市立女子短期大学、神戸女子大学、文教大学、各高等学校
●民間企業：青木茂設計工房、伊藤建築設計事務所、FEE、NSハイパーツ、エムズ、グッドリビング、

小林聡建築研究所、SUPPOSE DESIGN OFFICE、十仁プラザ、スウェーデンハウス、積水ハウス、タカマ、東建コーポレーション、内藤建設、ナカガ設計、バウハウス丸栄、藤川原設計、日本毛織
●進学：名古屋大学大学院博士課程(後期課程)、椋山女学園大学大学院博士後期課程、共立女子大学大学院博士後期課程

人間生活科学専攻 博士後期課程

時代の変化、社会のニーズに対応し、生活科学の研究・教育両面で指導的な役割を担う人材を育成します。

生活科学は、人間存在の根幹である衣食住に関する学術体系であり、人間生活科学専攻には関連の3領域を置いています。

生活科学を統合的に探究し、時代の変化や社会の要請に対応する学術研究を推進するとともに、

次代を担う研究者、あるいは、高度な専門的能力を持ち社会に貢献できる人材となる博士(人間生活科学)を育成します。

創造生活科学領域

■栄養保健科学分野	【担当教員】 教授 箕越 靖彦
-----------	-----------------

展開生活科学領域

■生化学分野	【担当教員】 教授 本山 昇
--------	----------------

■栄養科学分野	【担当教員】 教授 大口 健司
---------	-----------------

■空間環境科学分野	【担当教員】 教授 村上 心
-----------	----------------

統合生活科学領域

■臨床栄養科学分野	【担当教員】 教授 加藤 昌彦
-----------	-----------------

■環境調和システム学分野	【担当教員】 教授 藏澄 美仁
--------------	-----------------

■授業科目

生活科学領域における課題解決能力、研究開発能力の育成を主眼におき、各領域の「特別演習」、博士論文を作成するための分野・科目ごとの「特別研究」があります。

【特別演習】 専門分野における学識を涵養するために主指導教員が指導するものと、専門外の分野に対する知識・視野を広げるために副指導教員が指導するものがあります。

【特別研究】 博士論文作成のため、それぞれの専門科目について、主指導教員の指導のもとに行います。

■研究設備の例

質量分析は、化合物をイオン源でイオン化し、質量スペクトルから化合物を分析する方法です。研究科では、2種の質量分析装置が稼動しています。高周波プラズマ質量分析装置（ICP-MS）は食品および環境中の元素の高感度検出・定量を可能にし、特に微量元素に関する研究に必要とされます。三連四重極型質量分析装置（LC-MS/MS）は高感度、高分解能、高速での化合物の同定、定量、構造解析を可能とし、ペプチド、タンパク質や糖鎖の構造解析等に威力を発揮します。



ICP-MS

■過去の博士論文テーマ

- 生活の質を向上させるためのにおい環境の改善に関する研究
- 幼稚園児と母親に対する食育プログラム実施の効果に関する研究
- 入院高齢患者における栄養状態の経時的推移及びactivities of daily living、生命予後に及ぼす影響に関する検討
- 健康若年女性における有酸素運動が食後の糖・脂肪代謝に及ぼす影響
- Adverse effects of fructose-containing beverages on the health for young women
- 生活環境における色彩が人体に及ぼす影響に関する研究
- ケラチン繊維に対する酸化染料染色機構に関する研究

- 酸化染料染色におけるケラチン繊維表面層での重合・分解反応の寄与に関する研究
- 大腿骨頸部骨折術後高齢患者の認知機能、栄養状態および栄養介入がリハビリテーション効果に及ぼす影響に関する検討
- 若年女性における乳幼児期と現在の状況との関連に関する研究～特に問題点としての口コモ度評価と食後高脂血について～
- 健康若年女性における糖・脂肪摂取試験を用いた食後糖・脂質代謝の研究～とくにレムナント指標と空腹時値による予測可能性に注目して～
- 衣生活環境における衣服の保温性と衣服下微小空隙の熱伝達に関する研究
- 若年女性の日常行動が姿勢に及ぼす影響

■予想される進路

- 生活科学系、家政学系、栄養学系大学ならびに短期大学に設置された管理栄養士養成課程の専任教員
- 生活科学系、家政学系大学ならびに短期大学に設置された住居、生活環境系学科の専任教員
- 医科系大学に設置された栄養学研究室の専任教員
- 生活科学系、家政学系大学に設置された衣料管理士養成課程の専任教員

- 住宅設備機器、エネルギー関連企業の製品開発・企画担当者
- 建築関連企業の環境計画、設備設計担当者
- 食品・医薬品企業の研究開発担当(主任研究員クラス)
- 一般病院、介護保健施設(療養型医療施設、老人保健施設、介護老人福祉施設など)、介護支援センターなどにおける管理栄養士としての指導的役割

修了生の声

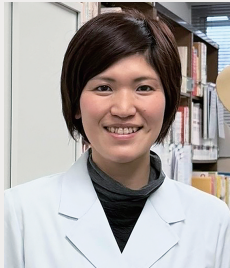
INTERVIEW [修了生の声]

生活科学研究科 人間生活科学専攻（博士後期課程）修了生

■出産・子育てをしながらの博士論文執筆。手厚いフォローで両立できました

研究科では、「若年女性における乳幼児期と現在の状況との関連に関する研究～特に問題点としての口コモ度評価と食後高脂血について～」をテーマに研究。若年女性の問題点について出生時から現在までの成長記録から明らかにし、健康寿命を延ばすための食事や運動の大切さを示しました。中高教員になるために修士課程に進んだ私ですが、縁あって修了後に助手として大学で働いたことから、大学での研究や学生の力になる仕事に魅

力を感じ、今に至っています。途中、出産して子育ても始まり、諦めなくてはならないことも多い中、絶えず見守り、指導くださった先生のおかげで、将来の糧となるさまざまな挑戦と博士論文執筆を両立することができました。今後は、学生たちに教員のやりがいや楽しさを教えること、そして栄養教諭や家庭科教諭といえば椋山！と言われるような環境づくりをすることが目標です。



加藤 舞子 さん
椋山女学国大 生活科学部管理栄養学科 助教

生活科学研究科 食品栄養科学専攻（修士課程）修了生

■培った知識と技術を生かし、日本人の食事摂取基準に貢献できるような論文を執筆することが目標

大学卒業後の病院での臨床経験のなかで、「予防」の重要性を痛感。また、国際学会への参加を通して、栄養学に関するエビデンスの乏しさなどを実感し、研究能力の向上を求め、社会人入学しました。仕事との両立はとても大変でしたが、先生方の温かいご指導のおかげで無事に修了し、その後、名古屋大学大学院にて医学博士を取得し、現在、疫学研究に従事しています。研究科では、高齢者のフレイルと食事摂取に関する

研究を行いました。現在も「高齢者の健康長寿をかなえる食生活は何か」を課題に、フレイル・サルコペニア・認知機能低下など的高齢者特有の健康課題と食事摂取に関する疫学研究を行っています。近年は「時間栄養学」にも興味を広げ、健康長寿食を探索しています。研究科で培った知識と技術が生かされ、複数の筆頭論文の執筆、食品関連企業との共同研究などが実現できています。



木下 かほり さん
国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 研究所 研究員

生活科学研究科 生活環境学専攻（修士課程）修了生

■研究科で養った視点を生かし、空間を創る仕事を通して人生を豊かにするお手伝いをしたい

学部で、当時注目され始めた「建築再生」「リノベーション」という建築手法に出会い、さらに追求したいと考え進学。研究科では「建築再生」をキーワードに、団地を対象を絞り、既存団地の活用方法を探るために海外の団地の供給方法や対象などを調べ、比較研究を行いました。韓国やオーストラリアなどで海外調査を実施。豊かな社会を作るための多様な仕組みや人種、貧富の差など社会問題にも目を向ける貴重な機会になりました。

慣れない環境で現地の学生と一緒にアンケート調査やインタビューを行ったのは大変でしたがよい思い出です。友人に自宅のリノベーションを依頼されたことをきっかけに自分の事務所を立ち上げました。現在は行政のコミュニティーセンターの改修などに携わっています。研究科で養った社会の問題に目を向け解決方法を探る視点が現在の仕事に生きています。



川口 香子 さん
kisaku design 代表

FACULTY [教員紹介]

●最終学歴 ●学位、資格 ●主要研究分野
●担当科目 ●最近の研究テーマ

●食品栄養科学専攻

大口 健司 教授	〈研究指導担当〉	〈博士後期課程担当〉
●岐阜大学大学院医学研究科博士課程生化学専攻修了 ●博士(医学)(岐阜大学)、薬剤師 ●分子栄養学、皮膚科学 ●栄養化学特論 ●「皮膚」を臓器のひとつとしてとらえ、食生活を中心とした生活習慣の良否が肌状態に与える影響を解析し、食を通じて体の内側から美しく健やかな肌をつくるための方法について考究している。		

●食品栄養科学専攻

本山 昇 教授	〈研究指導担当〉	〈博士後期課程担当〉
●名古屋市立大学大学院医学研究科博士課程修了 ●博士(医学)(名古屋市立大学) ●生化学、分子細胞生物学、老化科学 ●生化学特論 ●老化や老年病発症のリスクファクターとして注目されている細胞老化や細胞老化随伴分泌現象(SASP)の分子メカニズムの解明を行っている。 また、SASPを抑制する食品由来因子の探索研究も行っている。		

●生活環境学専攻

石原 久代 特命教授
●椋山女学園大学大学院家政学研究科修士課程修了 ●修士(家政学) ●被服心理学 ●アパレル設計・制作特論 ●生活者が健康で快適な生活を営むためには、年齢や性だけでなく生活環境に応じた被服であることが重要である。被服(アパレル)の機能性や審美性に関する要因の解明についての研究を主に行っている。 最近美しい着装のため人のゆとり量に関する研究やアパレル分野におけるAIシステムの導入に関する研究をしている。

●生活環境学専攻

村上 心 教授	〈研究指導担当〉	〈博士後期課程担当〉
●東京大学大学院工学系研究科博士課程建築学専門課程単位取得満期退学 ●博士(工学)(東京大学)、遼寧工程技術大学客員教授 ●建築学(建築／地域計画、建築社会システム) ●地域・建築計画特論 ●都市・地域・建築などの空間ストックを、持続可能性を考慮しながら、どのように計画するべきか、計画できるのか、をテーマとしている。キーワードは地域、建築、団地、再生、転用、住宅、小学校、国際比較(アジア(タイ・マレーシア・シンガポール・中国・韓国・インドネシアなど)、オセアニア(豪州・ニュージーランド)、欧州(オランダ・ドイツ・フランス・イギリス・デンマーク・スペインなど))など。		

●生活環境学専攻

槁本 雅好 准教授
●東京大学大学院工学系研究科博士課程建築学専攻修了 ●博士(工学)(東京大学) ●環境心理学 ●環境心理学特論 ●人間の心理的特性や行動特性を明らかにすることによって、人間が使用するモノ、活動する空間、交流する都市について、多角的な視点から分析し、それらによって得られた知見を活用して、現代社会に必要なインテリア・建築を模索する。

●食品栄養科学専攻

加藤 昌彦 教授	〈研究指導担当〉	〈博士後期課程担当〉
●岐阜大学医学部医学科卒業 ●博士(医学)(岐阜大学)、医師 ●臨床栄養学、消化器病学、肝臓病学 ●臨床栄養学特論 ●飽食の時代といわれる現代においても「入院患者あるいは在宅患者及び高齢者の多くに栄養失調が認められていることに私たちは目を向けるべきである」を研究テーマとしている。したがって、こうした患者や高齢者の低栄養状態が予後やQuality of Life(QOL)に及ぼす影響を明らかにし、さらに栄養学的介入により栄養状態の改善を得ることで、いかなるメリットが期待できるかを実際の臨床現場において研究する。		

●食品栄養科学専攻

及川 佐枝子 准教授
●三重大学大学院医学研究科博士課程社会医学系衛生学専攻修了 ●博士(医学)(三重大学)、管理栄養士 ●食品科学、食品の安全性 ●食品衛生学特論 ●食品に含まれる種々の化学物質の安全性を検討するため、それら化学物質による遺伝子損傷作用や酸化ストレス作用、炎症反応の誘導作用を解明し、がんなど各種疾病の発症や進行との関わりについて研究を行っている。

●生活環境学専攻

解野 誠司 教授
●京都工芸繊維大学大学院工学系研究科博士後期課程材料科学専攻修了 ●博士(工学)(京都工芸繊維大学)、繊維製品品質管理士 ●染色、仕上加工 ●アパレル染色・整理学特論 ●人工皮革に用いるポリウレタンフィルムの染色性と堅ろう性天然染料染色染色と匂い

●生活環境学専攻

井澤 幸 准教授
●日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科社会福祉学専攻博士課程修了 ●博士(社会福祉学)(日本福祉大学)、一級建築士、インテリアコーディネーター ●インテリアデザイン、居住福祉 ●インテリアデザイン特論 ●少子高齢社会を迎え、子ども・高齢者・障がい者のケアを家庭から社会全体で担う必要性が高まっている。それらを踏まえ、出産や産後ケア関連施設、学童期の子どもの居場所について、既存ストックを最大限活用するインテリアデザインについて研究している。

●食品栄養科学専攻

古田 真司 教授	〈研究指導担当〉
●名古屋大学医学部医学科卒業 ●博士(医学)(名古屋大学)、医師 ●公衆衛生学、疫学、学校保健学、教科開発学(教育学) ●公衆衛生学特論 ●主に疫学調査研究の手法を用いて、食に関する健康情報の見方・考え方に関する研究、健康教育の効果に関する介入研究、日常生活が精神的健康に与える影響に関する研究などを行っている。	

●食品栄養科学専攻

保田 倫子 准教授
●京都大学大学院農学研究科博士後期課程食品生物科学専攻単位取得退学 ●博士(農学)(京科大学) ●食品科学、生体機能学、食品機能学 ●食品化学特論 ●食品に含まれる成分とその効果について化学・生物学実験により明らかにする。機能性を持つ食品成分の有無ならびに毒性を持つ食品成分の有無を調べるとともに、それらの効果を科学的・論理的に検証する。

●生活環境学専攻

藏澄 美仁 教授	〈研究指導担当〉	〈博士後期課程担当〉
●豊橋技術科学大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程修了 ●博士(工学)(名古屋工業大学) ●熱環境、快適環境 ●建築環境工学・設備学特論 ●温熱環境の人体影響の解明とその結果を居住環境の創造や改善に活かすことを目的とし、人間の感覚を環境評価に応用することで、快適な居住環境の開発に向けた体感温度を組み込んだ環境制御システムの研究・開発をする。		

●生活環境学専攻

井上 尚子 准教授
●奈良女子大学大学院家政学研究科被服学専攻修了 ●博士(学術)(奈良女子大学) ●アパレル素材学 ●アパレル材料システム特論 ●人間の感性に適合したアパレル系材料としての性能設計、性能維持に関する研究をしている。アパレル材料、繊維複合材料の力学的性質、熱水分移動特性と風合い、品質の客観的評価との関係などに関して、人間の感覚に適合した性質とは何かを追究する。

●食品栄養科学専攻

箕越 靖彦 教授	〈研究指導担当〉	〈博士後期課程担当〉
●愛媛大学医学部医学科卒業 ●博士(医学)(愛媛大学)、医師 ●摂食・代謝調節学 ●栄養保健学特論 ●脳が、摂食行動に加えて、同時に体の各臓器に働きかけて代謝を調節し、恒常性を維持する機構を研究している。		

●食品栄養科学専攻

三田 有紀子 講師
●椋山女学園大学大学院生活科学研究科人間生活科学専攻博士後期課程修了 ●博士(人間生活科学)(椋山女学園大学)、管理栄養士 ●栄養教育学 ●栄養教育学特論 ●人々が自ら適切な食行動を実現できることを目指して、アンケート調査やインタビューによる質的調査を用いた多層的・多角的な調査分析を通じ、実践的栄養教育法の開発研究を進めている。

●生活環境学専攻

滝本 成人 教授	〈研究指導担当〉
●愛知県立芸術大学大学院美術研究科デザイン専攻修士課程修了 ●博士(工学)(名古屋工業大学)、一級建築士 ●プロダクトデザイン ●プロダクトデザイン特論 ●①各種材料と加工法による造形技法・表現技法の研究 中空ポリエチレン樹脂ウェーブクッション、高弾性ポリエステル繊維、アルミニウムパネル、後アルマイト加工、チタンクラッドメタル、蓄蛍光素材等 ②自助具の研究	

●生活環境学専攻

川野 紀江 准教授
●横浜国立大学工学部建設学科建築学専攻課程卒業 ●博士(工学)(名古屋大学) ●建築学(建築/施設計画) ●施設計画特論 ●人口減少時代を迎えつつある中で、学校・住宅等の都市施設ストックの抱える諸課題を解決することを目的とし、施設計画、管理・運営手法等について、ファシリティマネジメントの視点から研究を行っている。

相山女学園大学

星が丘キャンパス / 〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17番3号

日進キャンパス / 〒470-0136 愛知県日進市竹の山三丁目2005番地

■お問い合わせ／入学センター

入学相談フリーダイヤル

 0120-244-887

E-mail happy@sugiyama-u.ac.jp

●交通アクセス

